

平成27年度京都市伝統産業活性化推進審議会

日 時：平成27年12月9日（水） 13：30～15：30

場 所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 麗峰の間

出席者：15名（五十音順，敬省略）

大谷 貴美子	京都府立大学生命環境科学研究科教授
柿野 欽吾	学校法人京都産業大学理事長
金岡 亜友子	市民委員
河村 和子	京の伝統産業春秋会監事
島田 昭彦	株式会社クリップ代表取締役社長
滝口 洋子	京都市立芸術大学美術学部教授
塚本 稔	京都市副市長
日野 明子	スタジオ木瓜代表
三木 清	京都伝統工芸協議会会長
三原 陽市郎	京の伝統産業春秋会会長
村上 圭子	京都市産業観光局長
山舗 恵子	株式会社京都リビング新聞社統括編集長
山本 建太郎	京都工芸繊維大学名誉教授
若林 靖永	京都大学大学院経営管理研究部教授
渡邊 隆夫	西陣織工業組合理事長

欠席者：2名（五十音順，敬称略）

坂本 香代子	京都市立安井小学校校長
中村 真理子	市民委員

1 開会

2 塚本副市長挨拶

3 議事

報告事項 第2期京都市伝統産業活性化推進計画に係る平成26年度事業等について

4 報告事項説明後に意見交換

<委員>

・伝統産業製品74品目の出荷額が上がったとあるが，伝統産業課の独自調査か。また，どういった項目を聞いているのか。

<事務局>

・独自調査である。各組合等から出荷額，従業員数，組合加入事業者数を聴取している。

<委員>

- ・KYOTO CONTEMPORARY 事業について、参画事業者のフォローはできているのか。

<事務局>

- ・日本帰国後に凱旋展を実施しているほか、ノウハウを身に付けた参画事業者が新たに百貨店と商談を行うなど、現地商談に限らずフォローしている。

<委員>

- ・参画事業者へのフォローは1年限りか。
- ・以前にパンフレット類のデザインが良くないと指摘させていただいたが、このKYOTO CONTEMPORARY 事業のものは良くできていると思う。

<事務局>

- ・1年限りではなく引き続き参画している事業者もおられる。本事業から卒業された事業者に対しても、コーディネーターを通じて得た現地の情報を提供し、販路開拓を支援している。

<委員>

- ・展示商談会は1年限りでは結果が出にくいとため、継続が大切だと認識しており、3年を目処に継続して支援し、自立していただく。現に、卒業された事業者がメゾン・エ・オブジェという世界最大級の見本市に自身の力で出展されており、こういった形になっていくのがベストだと考えている。

<委員>

- ・雑誌などマスコミやSNSを通じて伝統産業を広く分かりやすく発信してくれる人が増え、伝統産業に対する受け止め方が変わってきていると感じる。海外からの観光客でも単に見るだけの観光ではなく体験型の観光を希望する方が増えてきている。最近では、さらに踏み込んで、竹細工の体験や座禅などを通して、自分とは何か、自分への振り返り等に対する答えを求めてきている方たちがおられる。
- ・これから観光客に伝統産業製品の購買に繋げるには、観光客などに製品作りをしている現場を見てもらうことが必要である。

<委員>

- ・ふれあい館について、この2年間来場者数が減ってきている。取り組みの進捗はどうか。

<事務局>

- ・これまでは伝統産業製品の展示を通じた普及啓発施設としてきたが、伝統産業の活性化に繋がる施設へ転換するべく、今年度から総合プロデューサーを配置し、様々な企画に取り組んでいる。
- ・販売促進事業として、ふれあい館を拠点とした工房訪問ツアーを実施し、参加者に職人の作業をってもらい購買に繋げていく。また、異業種間交流も進め、ふれあい館を拠点に伝統産業に携わる職人はもちろん、建設、アパレル、バイヤー、メディアなどいろんな方に集まっていただき、異業種間のコラボレーションにより、新たな商品作りなどに繋がるように取り組んでいく。

<委員>

・みやこめっせの1Fには人がいるが、ふれあい館のある地下になかなか人が降りてこない。人が降りてくるようにしてほしい。ふれあい館イベントルームで展示会を実施してもあまり人が入らず、残念である。

<委員>

・機敏にニーズを捉え商品作りをしている人もおり、そういったことが必要なのはわかるが、それを上回るペースで産地の売上は減っていき、疲弊している。

・西陣織会館も海外からの来館者が増えているが、売上にはあまり繋がっていない。商品開発しても商品と消費者のニーズとのマッチが難しい。

<委員>

・ふれあい館は展示の仕方がフラットなので、もう少しメリハリが必要だと思う。

・海外からの観光客でも、例えばヨーロッパの方と中国の方ではニーズが異なっている。どこに焦点を合わせるのかは考えなければならない。人を連れてくる仕組みはふれあい館で出来つつあるのかなと思う。

<委員>

・海外からの留学生をよくふれあい館に連れて行くが、日本の学生に比べて圧倒的に興味をもって見ており、海外の方がマーケットの可能性を強く感じる。パンフレットの充実も良いと思うが、彼らはスマートフォンやタブレットで情報を収集しており、ウェブ上の情報の充実が大切である。小さな工房となるとネットで探してもなかなか出てこないため、詳しい情報を手に入れたり、訪問しようとしてもアポの取りようがない。

・先日、デザイナーの卵である留学生を京繻の工房に連れて行くとすごく感激しており、そこで2ヶ月間お世話になった。彼らは国に帰っても京都の伝統工芸に対するオピニオンリーダーになるような人物であり、マーケットを作ってくれるなど将来的に大きな恩恵をもたらしてくれる可能性がある。ふれあい館ではそういった興味を強く持ってくれている人に対するサービスが十分ではないので、観光客だけでなく、留学生など伝統工芸に強く興味を持っている人への対応も充実させてほしい。

<委員>

・岡崎界隈の観光が充実している中で、ふれあい館の入り口への導線が大きな問題ではないか。ふれあい館のことを知らない人にも認識してもらえるようにしなければならない。

<事務局>

・二条通からふれあい館があるということを分かってもらえるように、木製のゲートをまもなく設置する予定である。また、その他にも、今年度は琳派400年展示を実施したように、美術館のような企画展をやっていく予定である。さらに営業の努力が十分でなかったため、ホテルのコンシェルジュや旅行代理店に対し積極的にふれあい館の周知を行っているほか、外国人への集客には口コミが大切であるのでトリップアドバイザーに書き込んでもらうための取組を進め、今年度市内の美術館・博物館ではトップの口コミ数となっている。

<委員>

・木製ゲートは今年度中に仮の案内を設置する。館内の導線についても専門家から様々な意見を頂いており、見直しているところである。ロームシアターが来年1月にオープンするので早く良い形にしていきたい。

<委員>

・ふれあい館のイベントルームで展示会を実施している際に、中国人の方で商品欲している方がおられたが、中国語が分からず売れなかった。ふれあい館でも英語の対応は出来つつあるかもしれないが、中国語の対応できるとよりよい。

<委員>

・まず、英語が完全に対応できるようにしてほしい。

<委員>

・ロームシアター京都はオープンな施設になると聞いており、雰囲気もかわると思う。ロームシアターとも連携できると、ふれあい館にも来場者が増えるのではないかな。

・ホテルには旅行雑誌には載っていないような、独自に作成されたマップやパンフレットがあり、そこに掲載してもらったり、海外からの来客用にふれあい館のチラシやパンフレットを置いてもらおうと集客に繋がるのではないかな。

<委員>

・ふれあい館のパンフレットを見やすいものにリニューアルし、日英の二ヶ国語で表記している。ホテルにも置いてもらえるように営業していきたい。

<事務局>

・ロームシアターについては、二条通に面していた会議棟に賑わい施設として飲食店や図書施設などが入る予定となっており、その運営事業者とふれあい館との連携について協議をしているところである。

<委員>

・みやこめっせもそうだが、ふれあい館周辺のエリアはあまり食については充実していないと感じる。箸置や器など京都の工芸品にもこだわった飲食店を併設するなど食に重点を置いて取り組んではどうか。

<委員>

・市動物園がリニューアル後行って見たが、魅力的になっていた。園内のレストランでは1時間待ちとなっており、飲食店が足りていないのを実感した。また、市図書館の動物関連の本が動物園内に並べてあり、その場で学べるようになっている。ふれあい館でも伝統工芸品に関する本を工夫して並べるなどしてはどうか。

<委員>

- ・ふれあい館でも図書は並べているが利用はあまり魅力的なものではない。

<委員>

- ・今のふれあい館の来場者では食の施設を併設しても採算が取れないのではないか。

<委員>

- ・それであれば、例えばふれあい館で、料理人を呼んで、季節の料理と器など伝統工芸品の設えで提供するイベントをやってみては面白いのではないか。

<委員>

- ・みやこめっせの1Fの飲食店はロケーションが良いが、厨房の問題もあり融通があまり利かないようである。

<委員>

- ・求められる課題はまだまだあると感じるが、総合的・先駆的な取り組みを業界と市が連携して出来つつあると感じる。26年度の出荷額が増加したのは大きな一歩だと思う。5年前の21年度出荷額と比較するとまだまだだが、これを継続していきたい。
- ・これまで国では繊維産業やアパレル産業、伝統産業というくくりで振興に取り組んできたが、経済産業省が和装振興研究会を立ち上げ、「きもの」をはじめとした和装の振興を進めようとしている。きもの文化をクールジャパンや地方創生の一環として、その魅力を内外に発信し、産業として振興していこうとしている。市や業界としてもこれらの動きを捉えて、しっかり和装振興の取り組みを行ってほしい。